

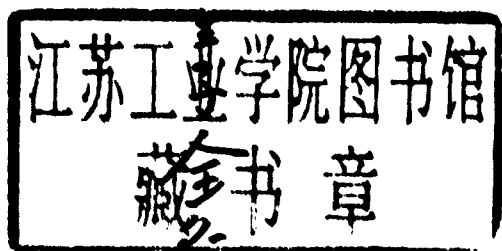
鄂上清生子全集

第Ⅱ期

第七卷

日記
7

鄂上學



第Ⅱ期

第七卷

岩波書店

野上彌生子全集

第II期 第七卷

第十回配本

(全二十六卷)

一九八七年八月三日 発行

定価四〇〇〇円

著 者 野^の上^{がみ}彌^や生^え子^こ

発行者 緑 川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・五五・四二
振替 東京六二二四

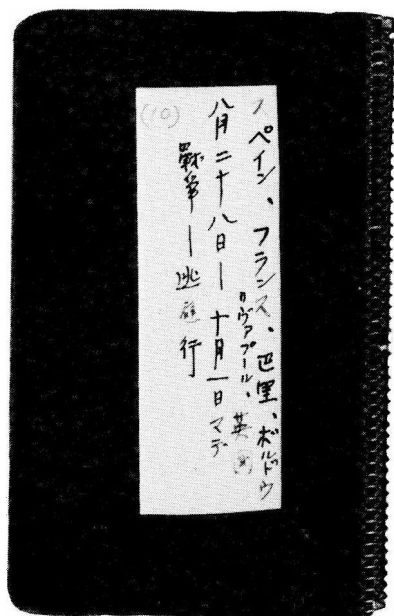
印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日
記
七

目 次

昭和十四年八月二十八日	一
昭和十五年	二三
昭和十六年	二七
昭和十七年	四八
後 記	五五



- (10) スペイン、フランス、巴里、ボルドウ
リヴァプール、英国
八月二十八日—十月一日マデ
戦争—逃避行

八月二十八日 月 晴

マドリッド行午後一時前出發。行く手にそば立つ山を一つ一つ征服しながら、丘陵ぞひの路を抜けて進む。短い青草の山、唐もろこし畑、ところどころに果樹。石を塗りこめた家多く、窓にそうて、廊下のやうな長いバルコンをつけてゐるのが、バスクの家の特長らしい。その他はアーチ形の門。右手に流るゝ河に架した橋も、石をたゝんだメガネ橋多し。

ヘンダソンが英の提議をもつて又ベルリンに歸つた。今日はムッソリーニも出たと云ふ。雨か、嵐か、危機が迫まつてゐる。

トロサ着。トラックが雲形にカムフラージュされてゐる

ザリ／＼と焼きつける日射し。しかし膝に日が当つてゐてもこの厚いスーツで汗が出ない。

オリヴィエツトの先きの山上の高原、環状の行く手の山に銀白色の群雲。日本の雲の峰よりは低く、連なつてゐる。この暑い中に収穫がつゞいてゐる。／並木の下でアミ物をする百姓女。二人の女の子。

エルボ河、エルボの町。^{〔エプロ〕}家の前で女たちベンチにかけて休んでゐる。

今日もカササギがとんでゐる。炎天の下の野を焼いてゐる。カメを持った水汲みの女。頭から赤い頭巾 広告、ライオンの画のついた酒と、マドリッドの宿屋 ナチオナール

銃をかついだ坊さん。／自転車とき／。女も乗つてゐる／路ばたのジプシーの馬車／麦のモミを分ける器具も赤と緑に塗る。／荷車も輪を赤、車台を緑／ブルゴスまで丁度三時間半を費した。／

この先きは新しい土地也。

褐と茶の平たい畑地、落ち穂拾ひの老婆、切石で積んで、赤い泥や石灰で塗った家／麦の山が連つてゐる／黒松、檜の群生、並樹にはポプラに似た木の古樹あり。黒茶、赤茶、白茶の果てなき野、低い、円い丘。白青の粉っ片のやうな麦の色、

家も土と同じ色。

モーラ將軍がここまで来て留まつてゐた。ガダラマ山、象のやうな黄灰色の山左右にあり。路はその間を走る。ポプラの並木。破壊された家左に一軒あり。／山にはわづかに苔のやうな草。黒い瘠馬放たれたり。／黄灰石を積んだ家、破れて、キナコの中にトノコ色／山の上と路にそうてザンゴウ白の最前線トノコ色の石を積みあげてある。土もトノコ色 赤軍のトーチカとザンゴウ。

鉄条アミの外づしたものをツム形に巻いたもの数十あり。近くの破壊家屋。ここを流れる清流がマドリッドの水源地

鋸形の山現はる。その間はなだらかな焦茶の岡と平原の耕地。黄色い胸十字に銃をもつた兵士二人のそく歩いてゐる

その先の村、女たち門口で仕事。黒衣多し、

小さいカフェの前に四人の男。

ごろ／＼岩の平原となる。紫灰色のごろ／＼岩の山。

夕日を受けて桃いろに染まつた丘陵。紅いろの雪が積もつたやう也 地球の骨組。土と樹と水と花

に飾られる前の。

産毛のやうな麦。

ところ／＼に村が群がつてゐる。長方形の小窓をもつた角塔を聳やかして教会。白シャツにズボンの村人。オリイヴ現はる。麦ははじめから枯草色であつたかもしれない。

夜 ホテル・ローマに投ず。

八月二十九日 火 晴

九時コーヒ店で朝食、トレドに出掛ける。途中の家に牛肉買ひの列。角の建物の軒下、門前に待つのは何買ひか？ 旧マドリットの小路を行^マけ、トレドの灰色の門を抜ける。破壊カオク両側にあり。日本の内閣辞職。

破壊家屋は悉く家根なく、外部のみ残る、ポンペイなり。ところどころにアカシアの並木。向ふの山上白軍、此方赤軍で打つ。破カイされた家の外で女三人洗タク。

山下の寺^{左手に遠く}シエラ・デロ・サンゼロス——スペインの中央と云はれる。

塹壕のつゞく枯原に農夫が馬を入れて耕す。／カムフラージュされたトーチカ。／郊外に出づ。井戸だけ残る。／水車を馬が廻してゐる。／カマボコ形の車三台、黒馬六七騎／カーキ服の人夫らしいものをツンダトラック二台 土塗りの村、赤衣の女たち、／大きな石の洗タク場。女たち数人／落葉松、オリイヴ、

タホ河を境にして白軍赤軍 赤白段だら染めの対陣／捕虜？ トラックに載せたセビロやカーキ服

の十数人。

オリアスを越えてタホ町。

マドリッドに住む不在地主の所有する漠々とした黄い畑地、ヤセルに任す。薄曇りで秋の如し。

アルカザール。士官学校に使用／アラビア人の城門。石を積んだ円筒形。

廢趾になつた石の下で飯事をする少女二人。粗朴な人形。

アルカザールの地雷火にやられた大穴。九月二十五日陥落の直前。赤サビになつて破はれてゐる自動車、士官学

校の食堂、赤サビの屋根。／そのルインの間に瑞々しい緑で吹き出した玉なりのアスパラガスに似た草

九月の九日と十日の両日赤軍の使者来る。二月のロー城に子供二人生る。パンヤが布団代り。父その子をアルカザールと称す。壁にそれが書いてある。使者前日のは大尉、明けの日のは僧。

礼拝堂にして病院に使つた部屋。／廊下の両側の部屋、血痕、／馬の油の△形の吊りランプ／校長モスカルドの部屋。その向側の井戸。向側の赤軍。路一つ／五人の尼。十五センチ砲の破片。

囚人籠城した。婦人子供ともに。死者百六人。八十六人と二人の女。あとの二十はその結果死す／九月十八日赤軍侵入。一つの小さい梯子で下から行つて戦ふ。円柱の取りまくコート／壁に一条の滝の如く流れてゐる血。

九月二十七日援軍来る。壁にギセイ者の写真。反対の壁に窓から入つたダン痕。二十名の援兵がはじめて入つた窓。

緑と藍と黄のモヤウの腰タイル。ギルトのランタン、杉の彫刻の合天井。

もとの校長室。急拵への手榴弾、盗んだ麦をオートバイの動力で曳^{ヒキ}いて拵^{ツクリ}へたパン。ラヂオ。／飛行機から落した食料とガソリン。／七月二十三日親子で使った電話機。十八の息子。薄藍の開襟シヤツとズボン。九月十一日に入つた僧が一隅でミサを与へた。台所のトナリのパン焼ガマ／水泳場の一隅のハカ、牛羊のトサツ場。

カセドラル

カーヂナル・メンドサ。コロンバスの保護者の一人。グラナダを攻めに行つた王と女王。／十一世紀のモリア人。アルフォンソ六世についた男、情はアラブで族はスペイン。

グレコを特別に見せる。六つのカギ／八千の真珠、赤がもつて行く。／グレコの画。マリアのコロネーションの彫刻／僧たちの法衣、

王と女王のテント。ミタ、ミタ。タント・モンタ、モンタ・タント。／サンゴと金糸の打敷。／金絵の三冊の聖書、二度のサワギでジュネーヴで発見。／ラファエル、ヴェラスケス。

十四キロの金、コロンプスの持つて来た金彫のお厨子。

円球の地図の描いたタマ二つ。一つは獅子一つは犬が支えてゐる。馬、ヤギ

三百万ベセタのマリア、金宝玉。／千八百五年、アルフォンソの刀とフランコの刀

ムッソリーニの送つた^{赤皮}ミケランジェロ作の十字架。

バルセロナの総理大臣のカバン中から出た宝冠／十四世紀のマリア、キリスト母の頸に手をのせる。^{ネグリン}

千五百年以来修ぜんしない礼礼堂^{リキドウ}カーデナルの肖像四周。入口の透し彫。／木彫のマリアとキリスト、九世紀ザクロをもつ。十四世紀のオルガン。十六世紀にポルトガルの旗をもつて来た兵士とその旗、灰鼠いろ。コンヴェントはもとユダア人の市場。

マドリッド再び

レチロの公園。

王宮の前の石を敷いた方庭こぼたれて青草。後王宮の兵營、褐色、アイ、黄の彩輪のドーム、破れた家の中でピアノ／マンサナレ河の向側の王宮の獵場／ウセラ区 *Nosotros* (味方) *Ellos* (彼)／マン字巴と入り乱た両方の線。

カサ・デ・カンポから王宮の裏、美しき散歩路が荒野、塹壕、四度掛け変つた橋 鉄の門。大学都市。ヴェラスケスの家／文科、理科 法科。／枯木の立ち木。／入り交つた陣地にどうして食料を運んだか。

エスカリオを遠く左の山上にのぞむ。岩根に通ずる路、押し出しに似る、笠松。ところ／＼に赤屋根

ナバシアの清水 マドリッドより七十キロ ナバシエラの松林清流／松のザンゴウ、はづした鉄条アミ

グラン・ハ——王の夏の離宮、噴水を段々に連ねて滝を作つてゐるのが珍しい。ヴェルサイユのこれも模倣。ドイツでもスペインでも王たちの奢侈は皆ルイ王朝を摸したのである。

離宮の翼に鉄条アミ一杯／アミ物をしてゐる女。木瓜の転がつたのを見て悦ぶ、壁のまへに数人の女と子ども、買った木瓜三箇——6ペセタ　メロン一つ——二ペセタ

イモセ山のおミワの糸巻のやうに巻いた鉄条アミ、グランハは赤。兵士ウロウロ／セゴビヤの水道。／丘陵の町。アラビアの模様をついた壁／セゴビアの寺院、黄紅色。アラビア風の透かし彫上部にあり。三重、角に円塔／白の町／浅い彫のアラビア模様／アルカザール。岩の空濠、陸橋でツナグ／後は小流れの河岸から積み上げたり。それに達する小路アラビアンナイトのかんじ。楕円の彫刻の門、浮彫の壁、黄灰地に白の模様、

畑の中の小さい寺とコンヴェントを右下に見下ろす。

セゴヴィアの裏町

右手の塀の上白い花、左の上にピエタの彫刻のある壁、その前の入口の女子供。

ヴァイアドリに着き、ホテル・インペリアルに投ず。その前に小雨がふつて来る。麦の山を途中に見たのが、雨でどうなるかと思ふ。

八月三十日　水　晴

セルバンテスの家、前に花園、その横から曲つて下にをりて行く。円柱、レンガの腰掛

花園は噴水を中心にバラ、夾竹桃の紅白、ヒルガホ、花しき一隅をなしてゐる。これは住宅ではない。ホテルになつてゐると云ふ家までは行かず、

カセドラルとサン・パブロ、これは正面のレース式の彫刻にムーア文化のあとあり。

大学——十四世紀、十六世紀には世界第一であつたと云ふ

サン・パブロもこの大学も前に短かい石柱並列、その上に盾をもつたライオンがある。

このヴァイアドリーは至るところに樹木のある小公園風なものありて美しく、大通りには石柱のアーケイド並立せり。古風もの寂びて町に品位あり。

昨夜クルマをとめて食事をした料理やの前の広場のベンチに外套を着て寐てゐた老婆を今朝同じところに見る。同じやうにかけてゐた老人や男たちが同じベンチにかけてゐるのはこれもここで夜を明かしたもののか？ 掃く女、アーケイドの柱の下でマキをナタで小さく伐る女、しかしづれも美しき顔したり。スペインなり。

(空白)

途中　の赤黄色の丘陵に群がる部落。土の壁、土の堀、丘陵に穴の並んでゐるのを望む。

今も穴居してゐるところ、支那の山西辺に似てゐると公使云ふ。河に渡せる橋のすべて石橋なる、ホロしたる荷車すべて支那なり。山は石を失つて長い台地となる。これもこの地帯の特色ならん。中欧の風雲はまだ低迷中、いろ／＼な交渉が行はれてゐるらしい。私の予想ははじめからイクサにはならないと思つてゐた。日本の内閣では新しき人員が極まつて新聞に出てゐる。アベ信行首相と外務、大蔵は青木、陸海軍も變つた。どちらにしても無方針と国内的コン乱を示すものに相違ない。九時過ぎブルゴスに入り、カフェーで朝食、パンも旨く白く、カフェの味もよし。カフェ前の飾り窓にネクタイ屋四ペセタが最上で二ペセタ三ペセタのものあり。

ノコギリ山の下の昼飯。

八月三十一日 木 晴

朝八時過出発。イルン河を挟んだ国境。サン・ジヤン・ド・ルース。藍服の漁夫、ハトバ 泰山の並木。町を出るとタマリンの若い並木に桃いろの花

バイヨンヌの町——河を挟んで美しき町

町を抜ける手前の左側の草原にカーキ服の兵士二三百名。新しく招集した兵隊を訓練してゐた。その先きから薄霧かゝる。ボルドウまで行くことこの霧では汽車に乗り遅れるシンパイありとてダックスに向ふ。林中に坦々としてゐるパリ行きの路、自動車が殆んど往来せず。わづかにトラツク三台と、汚い自動車一台、途中の家の前に留まれるもの一台きりであつた。こんな事は例外との事。前の兵士とこの淋しい路にはじめて現実にパリの峻悪な事情を感じる。十時三十五分ダックス発。公使もXさんも発車まで見送つて下さつた。公使は三等のキップを買はうとしたら自費で青キップを買つてくれる。厚情よの常ならぬ事を忘れてはならない。

パリに打つたデンポオも、地方から一切受けつけないのを——フランス人のも——公使の証明書で打つて下さつたのである。

駅で買った新聞にはルーヴルの彫刻をかつぎ出してゐる画、婦人のショファール、薬剤(士)の新募集者の画、天井や、窓に砂袋をつめてゐる画。子供たちがバスで地方へ運ばれてゐる画、二人の小娘が毛布の荷を下におき、首に移転先きを記したカードを下げて石のベンチにかけてゐる画など——まことに私たちは歴史的のページに進入してゐる。しかし車中には英人らしい海水浴焼けのした青

年と、黒服の婦人平常の旅客と何の違ひもなし

エスパリーニアは

トレドーの碧玉の空

キャベツの葉に似て

二片の白き雲ひら浮びたり

遠く故郷を憶ひ

仰ぐ眼に

涙ながるる。

夕方七時過ぎ巴里に入つた第一の駅オーストリッツのガラス窓藍いろに塗られたり、汽車のトワレの窓も同じいろ。

三色旗と赤十字のマークをつけた列車タイキ

ビアリッツで三週間の夏休みをしたと云ふ若き夫人

ケイ・ドルセイ

光藤氏出迎へてくれる。今のところは戦争はないのではないかと云ふ。少くともバリはおちついてゐる。すべての用意の出来た落ちつきとの事。カフェ・ドウムで食事。客も来てゐる。いつもより少し小人数。町の娘もゐる。たゞ街の往来の灯が消されてゐるので淋しい。それでも踊り場は四時頃までゐるとの事。

九月一日 金 晴